

連	載	
講	座	
第	2	回

市民消防組織の変遷

作家 童 門 冬 二

江戸時代“火事と喧嘩は江戸の華”といわれた。このふたつは密接な関係を持っている。

つまり、江戸は木と紙でできた町だから火事が多い。すぐ焼ける。そしてこのとき消防に当たるのがいろは四十八組といわれた市民消防組織だ。しかし、市民消防組織がつくられたのは第八代将軍徳川吉宗のときで、実際にその指導をしたのが名奉行といわれた江戸町奉行大岡越前守忠相である。大岡は将軍になる前紀伊(和歌山県)藩主だった吉宗によって発見された人材だ。伊勢山田奉行をつとめていたが、その裁判が非常に公正だということで早くから吉宗は目をつけていた。将軍になった吉宗が大岡を江戸町奉行に登用したが、はじめから江戸町奉行にしたわけではない。最初は普請奉行だった。それは火事の多い江戸の町では、常に復興作業がおこなわれる。これは普請奉行の所管だ。しかし、燃えた後の町の復興よりも、燃える前の予防策を講ずる必要がある。同時に当時の消防組織は、大名家の連合による“大名火消”と、幕臣である旗本やその家臣による“旗本火消(定火消)”のふたつだった。

つまり、江戸の消防組織は「武士による組織」だったのである。吉宗は大岡にいった「武士だけが江戸の消防にあたるのは不公平だ。市民も、自分の生命や財産を守るために消防に努力すべきだ」。いまでいえば江戸市民の権利と義務のけじめをはっきりつけようという意味だ。大名火消は寛永十八年の江戸大火によって設けられた。定火消は明暦の大火の後設けられた。明暦の大火後は、さすがに良識ある江戸市民も「われわれ市民も消防組織を持つべきだ」といって、自主的に火消の組織を組んだところもある。しかしこれはあくまでも自発的なもので、公権力がどうこうしたものではない。したがって吉宗が将軍になる前の江戸消防はほとんどが定火消が主体となって活躍していた。明暦大火後には、江戸の防災都市化もおこなわれ、道路の拡張や新設・防火堤や空地、広場の設定・両国橋・永代橋・新大橋の架設、武家地や社寺地の配置がえなどが積極的におこなわれた。市民による消防組織、すなわち町火消が制度化されたのは享保三年十一月のことだといわれる。吉宗は大岡に命じて「今後の消火は、町火消が主体になるように指導せよ」と命じた。そこで大岡は本腰を入れて町火消の育成指導に当たった。消火の指揮は町奉行所の与力が出動しておこなった。最初設けられた町火消の組は、よ組・千組・に組・せ組・か組・ほ組・い組・も組・ろ組・め組・百組・は組・す組など十三組だったという。人数は六千八百七十六人いたそうだ。これがしだいに増えて、組の再編成もおこなわれ、一番組から十番組に分けて編成されるようになった。同時に、江戸市内の防災化もおこなわれた。それまで禁じられていた倉作

り・塗り屋・瓦屋などが許可された。というよりもむしろ積極的に奨励された。屋根の不燃化には江戸湾の浜辺にたくさん落ちていた蛎の殻の利用も奨励された。東京都内に残る蛎殻町という地名はその名残だ。

江戸町奉行というのは、いまでいえば東京都知事・警視總監・消防總監・東京地方裁判所の所長などを兼ねる重要なポストだ。大岡はこのほかに、

「食糧増産のための関東地方の農業指導」

も命ぜられていた。当時も少子化がかなりすすんでいたもので、吉宗は、

- ・少子化を食い止め、逆に子どもをたくさん生むためには食糧増産が必要だ
- ・食糧増産のためには、関東地方のいまの農業技術では限界があるので、和歌山藩主のときに経験した紀州流の農業指導を導入する
- ・そのためには、大岡に江戸の城下町の治安維持だけでなく、関東地方の新田開発などの指導もおこなわせる

と考えたのである。現在関東地方に残る“ナニナニ新田”と呼ばれる地名は、ほとんど吉宗が命じ、大岡が指導した開発地だ。吉宗が展開した“享保の改革”は、その後の“寛政の改革”や“天保の改革”の手本になった。同時に、各大名家がおこなう藩政改革の手本にもなった。吉宗の改革の目的は、

「元禄バブル時代に緩んでしまった武士や国民のきもちをもう一度引き締める。もっと他人のことを考えるような気風をよみがえらせる」

というものだった。したがって、徳川幕府のバランスシートの赤をゼロにするだけではない。国民の心の赤字もゼロにしようと考えた。そのためには、

「なによりも環境改善を欠くことができない」

と思った。環境改善の模範を、まず自分の膝元である江戸の町からおこなおうと思ったのである。そしてその実行者として大岡を登用したのだ。江戸の不燃化や、火災予防計画などはその一環であって、「市民消防組織」の設定もそのひとつである。つまり市民消防を組織をつくることによって、吉宗は、

「生命や財産がいかに大切なものであるかを知り、同時にそれを共同で守り合う精神を培養する」

ということである。組織運営のためには当然金がかかる。その金を分担し抛出することによって、

「この組織は何のために設けられているのか」

という認識も育つ。これも吉宗の「市民は権利の主張だけでなく、義務も果さなければならない」というけじめのつけ方につながっていく。大岡はこのへんをよく心得て積極的な指導をおこなった。大岡は七十五歳で死ぬが、墓は神奈川県茅ヶ崎市にある。毎年四月に“大岡祭”というのがおこなわれて、この祭りには、江戸消防記念会の有志が積極的に参加しているときいたことがある。その際、江戸消防記念会の有志が、伝統のまといを振り、木遣りを唸るのだという。長く

伝わってきた江戸の美風とっていいだろう。